2024年1月7日 久宝教会 新年礼拝メッセージ

「私の神様」　　水谷憲牧師

聖書　ヨハネによる福音書 1章 29−34 節

年が明けたと思ったら、大きな地震もあり羽田空港で飛行機同士の衝突事故もあり、新年早々すごくどきどきと不安になるような出来事がおこりまして、今年はこれからどうなるのでしょうか。いずれにしても、被災された方々の生活が早く建て直され、大事な方を失った方々の悲しみが少しでもいやされますようにと祈らずにはおれないところであります。さてその一方で、幸いにもそのような大きな試練からは免れている私たちは、すでに日常が始まりつつあるわけです。本来正月というのは、本日 7 日の松の内まで、松の内も古くは 15 日までといわれており、門松などの正月の飾り、もう今どき門松を見かけることも少なくなりましたが、そういったものを片付けるのもそれからなんだそうです。そして同様に、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスも、12 月 24 日・25 日で終わってしまうものではなく、厳密に言うと、12 月 25 日から 12 日後の 1 月 6 日までとされているそうです。ですからヨーロッパなどではクリスマスの飾りは 6 日まではつけられているのだといいます。なお、ロシアやウクライナなどの東方正教会では、当時使用していた暦の違いからか、伝統的にクリスマスは 1 月 7 日、本日ですけれども、1 月 7 日にお祝いされているようで、所によっては 12 月 25 日と 1 月 7 日とクリスマスを 2 回お祝いしたりもしているようです。

さて、西方教会におけるクリスマスの最終日である昨日 1 月 6 日ですが、キリスト教の暦では「公現日」、つまり「キリストがこの世に公に現れた日」だとされています。「キリストがこの世に公に現れた」とはどういうことか。それは単にキリストがこの世に生まれたというだけの意味ではありません。「公に」というのが大事なところです。「公現」とはギリシア語でエピファニアと言いますが、それは「輝き出る」という意味です。つまりこの日は「真理の光が輝きだした日」「全世界のすべての人々にキリストの輝きが及ぶようになった日」ということです。真理の光・救いの光が暗闇の中にぽっと灯った、というだけでなく、その光が世界中に向けて輝きだしたという日であるわけです。

ルカ福音書においては、幼子の誕生を初めに訪問したのは羊飼いたちでした。彼らは貧しく、しかもその不規則な生活スタイルのために、周りの人々からは「奴らは律法を守らない汚れた卑しい者たちだ」という誤解を受けていました。そんな彼らに、神は一番に救い主の誕生を知らせ、幼子にまみえる栄光を与えてくださった。しかし、確かに彼らは貧しく虐げられた者たちではありましたが、ユダヤ人という枠をまだ越えてはいなかった。つまり、キリストの輝きが全世界のすべての人々にまで及んだ、とまではいえなかったわけです。そして、その神の救いの恵み・キリストの輝きがユダヤ人という民族の枠を越えて、全世界に注がれるものであることが証しされたのが、東方の占星術の学者たちの幼子訪問であったといえます。そのような意味で、その１月６日の公現日、カトリックなどでは、この日も祝祭日とされているようですが、その日には、東方の学者たちのキリスト礼拝の記事が読まれているようであります。

そしてもう１つ、「全世界のすべての人々にキリストの輝きが及ぶようになった日」という文脈において、イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受ける場面も読まれています。こちらの方は、キリストの輝きが洗礼によって具体的に世界中に及び始めた、キリストの宣教開始の日としての「公現」というわけです。そして本日私たちは、その「キリストの洗礼」という出来事に関連した箇所を取り上げているわけです。

ここで洗礼者ヨハネは、自分の方に近づいてくるイエス・キリストを指して、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」と言いました。この言葉はカトリックのミサ曲などにもある「アグヌス（アニュス）・デイ」という言葉であります。「アグヌス・デイ」というのは「神の小羊」という意味のラテン語だそうです。この「小羊」という「アグヌス」は今や「アグネス」という人名ともされているほどに有名なものとなっています。

しかし、続けて洗礼者ヨハネは言います。「私はこの方を知らなかった」。ヨハネはこの言葉を２度も語っています。洗礼者ヨハネはルカ福音書を見ても分かるように、イエスの親戚であったはずなのですが、それを知らないとはどういうことか。この「知る」という言葉は、ヨハネによる福音書においては「頭で理解する」ということではなく「体全体で知る」とか「人格的・体験的に知る」という意味で使われています。ヨハネは、そのような意味においてイエスのことを知らなかった、というの

です。つまり、ヨハネはそれまでナザレのイエスのことを、ナザレに住んでいて、父親の仕事を手伝い自らも大工仕事をしているイエス、母親はマリアで兄弟はヤコブ、ヨセフ、ユダ、シモンであるといったふうに、自分の親戚として知ってはいたけれども、そのイエスが自分にとってどんな存在であるのかということまでは知らなかったわけです。しかし今や彼は、目の前にいるイエスが自分にとって何であるか、どんな存在であるのか知っている。イエスの上に霊が鳩のように降ってくるのを目の当たりにしたことによって、彼はイエスがまさに啓示によって告げられた神の小羊たる人物・聖霊によって洗礼を授ける人であることの確信に至ったのです。この方がイスラエルに現れるために、私は水で洗礼を授けに来たのだ。私が今まで水による洗礼を授けてきたのは、この方のためだったのだ。この方が現れるためだったのだ。私は人々に水で洗礼を授けながら、この方が現れるのを待っていたのだと。この「私はこの方を知らなかった。しかし～」という２度も繰り返されているヨハネの言葉は、今までは知らなかったけれども、でも今は知っている、というヨハネの喜びの叫びであるように感じます。

私たちはこのヨハネのように、万感の思いでイエスのことを「この方こそ神の小羊だ、私のための小羊・私のための救い主なのだ。この方こそ。」と告白することができているでしょうか。聖書を読んでイエスのことをいろいろと知識として知ってはいても、本当にイエスが自分にとっての救い主、自分にとっての神様であるという確信を、実感として持てておるでしょうか。もしかしたら、私も含めて本当には持てていないかも知れません。しかし、イエスの一番弟子であったシモン・ペトロであっても、そんな確信は実は持てていなかったのです。

シモン・ペトロはある時イエスに「人々は私のことを何者であると言っているのか」と聞かれて「ある者は洗礼者ヨハネであると言っています。ある者はエリヤだと言っているし、預言者の一人だと言う者もいます。」と答えました。そしてイエスが、「それではあなた方は私のことを何と言うのか。」と聞くと、ペトロは「あなたはメシアです。」ペトロはイエスのことをメシアであると、一応頭ではわかっていた。しかしその一方でペトロは、イエスが逮捕された時にその同じ口で「あんな人のことは知らない」と ３ 度も言ってしまったのです。イエスのことをメシアであると知ってい

たはずなのに、いざとなって「あんな人は知らない」といってしまった。それはやはりペトロがイエスのことを実感として「この人こそ私のための小羊なのだ、私の救い主なのだ」と告白できる確信にまで至っていなかったからではないでしょうか。しかし、そのように「この人こそ私のために与えられた小羊、この人こそ私の神様だ」という確信にまで至ることができていなくても、イエスをそれでもキリストであると信じよう、この人こそ私たちのための救い主であると信じたい、という思いさえあるならば、私たちにその確信はいつかきっと与えられるでしょう。私たちがたゆまず聖書に学び、イエスの姿を追いかけてゆくならば、きっとその確信は与えられるでしょう。だいたい、ああ私は今まさにキリストと出会っていると思うことなど、なかなかないでしょうし、むしろ、私たちはそのキリストとの出会いに後になって気づかされるものかもしれません。祈っても祈っても聞かれない。いくら切実な思いで願っても、ちっともかなえられない。返ってくるのは神の声どころか、耐え難い残酷な神の沈黙のみ。なんだ、信仰の世界などやっぱりそんなものかと、そこまで思ってしまうこともあるかもしれません。しかし、そんなしんどい苦難が過ぎ去った時に振り返ってみれば、苦しくて仕方なかったあの時こそ、実は私は神様に抱かれていたのではなかったか、そう気づかされることも、もしかしたらあったりするかもしれません。

たゆまず祈り、聖書とそこに伝えられるキリストの姿に学び、それに倣ってたくさんの隣人に愛を持って仕えていきましょう。その歩みの中でいつか必ず、私たちにもキリストを「この人こそ私のための救い主だ、この人こそ私のための神の小羊だ、この人こそ、私の神様だ」と確信を持って告白できる時が与えられることを信じていきたいと願いつつ、新しい年を歩んでいきたいと思います。新年早々起こったさまざまな出来事、あるいは今でも世界中で続く紛争のことなどを思うと、私たちは「あけましておめでとうございます」とはなかなか軽々しくは言えない。けれどもどうか、私たちにとって新しいこの年が、神様の守りと導きの中でよいものとなっていきますようにと、一緒に祈っていけたらと思っています。